【262】

氏　名（国籍）	金（きむ）　妍 延（よん じょん）（韓　国）
学位の種類	博　士（学　術）
学位記番号	博　甲　第　5076　号
学位授与年月日	平成 21 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	**母親に情動を生じさせる乳児の音声に関する検討**

主　査	筑波大学教授	博士（医学）	一　谷　幸　男
副　査	筑波大学准教授	医学博士	岩　本　義　輝
副　査	筑波大学准教授	博士（心理学）	加　藤　克　紀
副　査	筑波大学教授	博士（心身障害学）	四日市　　章

論文の内容の要旨

本研究は，乳児の泣き声が母親の育児ストレッサーとして，養育者の暴力の引き金となるのかという疑問から始まり，乳児の音声が養育者である母親の感情に及ぼす影響を探ることを目的として行われた。

研究 1 では，母親が育児場面において接すると思われる乳児の 9 つの非言語音声を音声刺激とし，これに対する母親の情動や感情を測定し，不快情動や不安定な感情と育児ストレスとの関係を検討した。その結果，母親が日常の育児の中で接する乳児のほとんどの音声は，母親にとって不快な音声ではなかった。それは乳児の音声が母親にとって乳児への対処行動や養育行動を考えさせる刺激であることと関係しているのではないかと考えられた。すなわち，母親にとって乳児の音声は母親が無視したり排除できない音声であるため，母親が乳児のほとんどの音声に対して不快情動がみられなかったと思われた。

一方，母親の不快情動が誘発された音声としては，痛み状況や空腹状況での泣き声ではなく，母親の不在状況での泣き声があげられた。母親がなぜ不在状況での泣き声に対して不快情動が刺激されたのか，その背景に関する更なる検討が必要とされた。また，母親の「心配」感情やいらだち感情など母親の不安定な感情を誘発させる音声としては，痛み状況，空腹状況，不在状況音声など 3 つの泣き声があげられた。これらの泣き声は乳児が不安定か不快な状態から発声される音声と考えられ，母親の不安定な感情との関連性が理解できるかもしれない。

そして，これらの不快情動や心配，いらだち感情と母親の育児ストレスとの関係をみたところ，乳児の音声に対して母親に不快情動や不安定な感情が生じたとしても育児ストレスとの関係は認められなかった。母親の育児ストレスというものが，ある出来事や感情によって一時的，瞬間的に生じる状態より，ストレスになる出来事や感情が持続され，蓄積された状態であることと関係しているように思われた。

研究 2 では，泣き声の中でどのような状況から発せられた泣き声に母親の不快情動が生じやすいのか，6 名の乳児の 3 つの状況からのそれぞれの泣き声計 18 個を用いて，泣き声と母親の不快情動との関係について更なる検討を行った。その結果，母親たちが不快と思う泣き声は，同じ空腹や痛み，母親の不在状況で発せられた泣き声でも，母親が不快と思う泣き声とそうではない泣き声があることが明らかにされた。それは，その時の乳児が感じる不快程度と関係しているように思われた。特に，母親の不在状況から発せら

れた泣き声は，他の状況で発せられた泣き声より，母親の不快情動と関係していることが再び確認された。

研究 3 においては，母親に不快情動を引き起こした泣き声を対象とし，それらの音響学的な特徴を調べた。分析要素としては基本周波数，最大周波数，平均音圧，最大音圧を用いた。その結果，母親の不快情動と関係した泣き声の音響学的な特徴としては，高い周波数や大きい音圧，周波数の変動の大きさ，長い発声時間などが挙げられた。これらの音声特徴は先行研究でも指摘があったが，母親不在状況での音声もこのような音声特徴をもっていることが，本研究で明らかにされた。

研究 4 では，母親が泣き声を聞いたときに生じる情動と，母親の生理反応との関連性について検討した。生理反応指標としては呼吸（呼吸数，乱れ呼吸）と心拍を用いた。その結果，15 秒間で対象者の 95％が 3 ～ 5 回の呼吸をしていたが，それは異なる情動評価をした際にも変わらなかった。また，泣き声の情動評価を「不快ではない」と「不快である」の 2 群に分けて検討しても差は見られなかった。しかし，情動評価と乱れ呼吸との関係においては，泣き声を「快」と評価した際には乱れ呼吸が見られなかったのに対し，泣き声を「やや不快」,「不快」と評価した際に多くの乱れ呼吸が見られる傾向があった。さらに，心拍数と情動評価の関係に関しては, 異なる情動評価により心拍数の違いが有意に認められた。また, 泣き声を「不快である」と評価した際の心拍数が，泣き声を「不快ではない」と評価した際の心拍数より高い傾向が見られた。

以上のように，乳児の泣き声は，誰にとっても嫌悪的な感情を引き起こすもののように思われるが，今回の研究結果は必ずしもそうではないことを示した。対象となった母親達は，泣き声で気持ちの落ちつかなさは感じるとしたものの，その状態を不快とするものは少なかった。乳幼児の子育てをしている母親達にとって，乳児の泣き声は何らかの育児行動を取らせるサインとして受け止められやすかったと考えられる。一方で，泣き声を聞いて不快と感じたときには，そうした母親達でも呼吸や心拍に変化を示していた。日常的に育児を行っている母親にとって，乳児の泣き声は，ときに強い情動変化を与える刺激となることを示したといえる。このことは，乳児の泣き声に対して不快な情動を感じることが，誰にでも起こりうることをある程度客観的に示唆したと考えられ，子育て中の母親達への育児支援において役立つものと思われる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は，乳児の泣き声が母親にどのような情動や感情を引き起こし，それが母親の育児ストレスとどのように関連するのか，母親に不快情動を生じさせる泣き声の音響学的特徴は何か，さらに母親が泣き声に対して感じる情動と母親の生理反応の関係を明らかにした研究として，評価できる。

よって，著者は博士（学術）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。